

# ロンサール詩集注

## その1-2

「マリー・スチュアートへのエレジー」

江 口 修

(承前)

前回、010行の《l'Inde despouillée》について「詩的許容を考慮すれば……」と解釈の曖昧さを残しておいたが、その後ランス大学のイヴォンヌ・ペランジェ教授への問い合わせ、さらにロンサール研究会の総会での研究発表での議論の結果、《despouillée》は《Inde》に掛かる以外の解釈はありえないとの結論に達した。インドに関する認識はギリシャ古典の発想をそのまま引き継いでいる。たとえば、『恋愛詩集』を探て見ると、

Heureux les champs qui eurent cest honneur  
De la voir naistre, & de qui le bon heur  
L'Inde & l'Egypte heureusement excelle. (t. IV, p.107)

あるいは《Indes》の複数形で、

De ses cheveulx la rousoyante Aurore  
Eparsement les Indes remplissoyt,  
Et ja le ciel à longz traitz rougissoyt  
De meint esmail qui le matin decore, (t. IV, p.79)

Si ce grand Dieu le pere de la lyre,  
Qui va bornant aux Indes son reveil, (t. IV, p.90)

つまり、東方を象徴する「豊穡」の地として用いられている。単数形と複数形との間に意味的な相違はない。ところで、新世界の及ぼしたフランス文学に対する影響については、未だに Gilbert CHINARD の *L'exotisme américain dans la littérature française au XVI<sup>e</sup> siècle*, Paris, 1911 を凌ぐ研究が出てきていないように思われる。ローモニエ (*Ronsard poète lyrique*, Paris, 1909) やシナールのようにロンサールをモンテーニュに先駆けた新世界理解者とするのはどうであろうか。東方と西方両極に異界でありながらきわめて「豊かな」世界があると考えたと見るのが、自然ではないだろうか。北は極寒、南は炎熱地獄というのが当時の常識であったのだから。その後の無頓着ぶりからしても、そのように思われる。しかし、ロンサールの *Les Isles fortunées* (*O. C. T. V*, pp.175—191) のヨーロッパ批判は、確かに鋭いものがある。

- 019 Un cresse long, subtil & delié,  
 020 Ply contre ply retors & replié,  
 021 Habit de dueil, vous sert de couverture  
 022 Depuis le chef jusques à la ceinture,  
 023 Qui s'enfle ainsi qu'un voile, quand le vent  
 024 Souffle la barque & la pousse en avant.

020 《retors》はマルティ・ラヴォーの *La langue de la Pléiade* (以下 M. L. と略記) によると、十六世紀特有の過去分詞形で《retordu》である。これはラテン語の文詞からの派生である(グーゲネム参照)。

022 《chef》はもちろん「頭」の意味であるが、注意しなければならないこととして、この場合「首から下」に解釈してはならない。頭全体(ユゲ)を意味し、すっぽりと「喪服」を被っていることになる(→033)。

024 78—87年の版では《pousse》が《single》に換えられている（L版脚注）。《singler》は「向かわせる」の意（ユゲ）で、十六世紀にのみ用いられた航海術用語（M. L. t. I, p.414）。「航海」のイメージをより強めるために採用したのであろう。ところで、十六世紀の詩人達にとって、「航海」はとりわけ親しい詩のトポスであったが、ペトラルカ以後のその経過を見事に浮き彫りにしてくれるのが、伊藤進、「ルネサンス詩のテーマの変奏：愛の航海」（I）（II）（『中京大学教養論集』第27巻，1986年，所収）で、航海術の専門用語が登場する時代的必然性を理解させてくれる。

以下同様に拙訳を試みておくと、

長く、しなやかでほっそりとしたクレープ布、  
 その千々に乱れたひだひだ、すっぽりと  
 腰までを覆う喪服の衣は、  
 風を受け前へと進む船の  
 帆布のごとくに膨らみかえる。

025 De tel habit vous estiez acoustrée,  
 026 Partant hélas! de la belle contrée  
 027 (Dont aviez eu le Sceptre dans la main)  
 028 Lors que pensive, & baignant votre sein  
 029 Du beau cristal de voz larmes roulées,  
 030 Triste marchiez par les longues allées  
 031 Du grand jardin de ce royal chasteau  
 032 Qui prend son nom de la source d'un(e) eau.

025 《acoustré》は accoustré とも。現用では「おかしな服を着せる」という意味であるが、ここではもちろん単に「服を着せる」の意。十七世紀に

〈高尚体 (style noble)〉 確立の際、ビュルレスク文体向けとして、詩語から排除された (M. L. t. I, p.429)。

027 無論、マリー・スチュアートがフランソワII世の許嫁であったことの意味。大過去になっていることに注意しておくべきか。以下の半過去の記述で、すでに忍び寄る不運を予感していたことが語られている。

031—032 ローモニエの脚注を待つまでもなく、フォンテーヌブローの城のことである。以下の描写に基づいて、ノラックはこのエレジーに「フォンテーヌブローのマリー・スチュアート」というタイトルを付けたのであろう (前号参照)。

(拙 訳)

このような出で立ちにて、  
 ああ！ 美しき国を離れられるとは、  
 (王杓をその手中にされたことがおありだというに)  
 いま思えば、物思いに沈み、美しき水晶のような  
 その襟元をこぼれる涙に濡らし、  
 その名を泉に由来する王宮の  
 広大なる庭の長き道を悲しげに歩いていらっしやった。

033 Tous les jardins blanchissoient sous vos voile,  
 034 Ainsi qu'au mast on voit blanchir les toilles  
 035 Et se courber bouffantes sur la mer,  
 036 Quand les forsats ont cessé de ramer :  
 037 Et la galere au gré du vent poussée  
 038 Flot desur flot s'en va toute elancée,  
 039 Sillonnant l'eau, & faisant d'un grand bruit

## 040 Pirouëter la vague qui la suit.

033 ローモニエが脚注で引用しているマルカスユスの注によると、「当時、喪服として、貴婦人達が足元まで布のヴェールを巻き付けていたためである」となっている。022との関連からすると、まず、下に白地の布を足元まで巻き、その上からふわりとしたヴェールを頭からすっぽりと掛けていることになる。ここで、ガドツフルの解釈を紹介しておくべきと思われる。すなわち「後の顔から手へ、喉へ、王室の喪のヴェールへと、そして后をスコットランドへと連れ返る船の帆へ、泡立つ波へと、白のイデーが貫かれている」（前掲書、p.96）とし、このエレジーを前バロック的な不安定性が支配しているとするマルセル・レイモンに対し、視覚に訴えながら「収聯してゆく波動」の典型の一つと見ている。いずれを採るかは集注の域を越える問題であり、論を改めなければならないだろう。

035 《bouffantes》は「膨れ上がる」の意味だが、M. L. はこれをアルカイズムの語法に分類している（t. I, p.233）。

038 《desur》は言うまでもなく《sur》の意であるが、機械可読化の終わった『恋愛詩集』を試みに検索して見ると、《desur》は一度も用いられていない。音綴数上の問題と単純に判定してよいのか、あるいは荘長な趣があるのかどうか、判然としない。

040 《pirouëter》は「回す」の意。これもビュルレスク文体向けとして十七世紀、詩語から排除された（M. L. T. I, p.431）。

（拙 訳）

貴方の喪のヴェールで、庭という庭は白変、  
囚人達が權にかけた手を休め、マストにかかる

帆がひとときわ白く、ゆったりとした  
 膨らみを海面に垂れるように、  
 風まかせに進むガレー船は  
 滑るように波から波へと進む  
 波跡を曳きながら、追いつがる波を  
 砕き、轟かせながら。

- 041 Lors les rochers, bien qu'ils n'eussent point d' âme,  
 042 Voyant marcher une si belle dame,  
 043 Et les deserts, les sablons & l'estang,  
 044 Et meint beau cygne habillé tout de blanc,  
 045 Et des hauts pins la cime de vert peinte  
 046 Vous contemploient comme une chose sainte,  
 047 Et pensoient voir, pour ne voir rien de tel,  
 048 Une Déesse en habit d'un mortel  
 049 Se pourmener, quand l'Aurore estoit née,  
 050 Par ces jardins cueillant la matinée,  
 051 Et vers le soir, quand desja le Soleil  
 052 A chef baissé s'en alloit au Sommeil.

044 78—87年の版では《Où vit maint cygne habillé tout de blanc》となり、前行とのつながりがより明確になっている。《maint》は十六世紀「本当によく使われた」（グーゲネム、p.102）「多数」を示す形容詞。

048—049 同じく78—87年の版では《Se promener, quand l'Aube retournée/Par les jardins pousoit la matinée》と改められており、《pourmener》の綴りの変化と共に、049行の大幅な変更注目させられる。一言で言うなら、神話の擬人表現が弱まり、マリー・スチュアートにより焦

点が合わされていると考えられる。

総じて、この部分はロンサールの手練とも言うべき詩風の展開で、新味には乏しい。

(拙 訳)

すると、心持たぬ岩礁が  
 かくも美しき貴人の進むを目にし、  
 さらには、無人の野も、砂丘も、潟も  
 真白な無数の美しき白鳥も、  
 貴方を聖なるもののごとくに見入り、  
 目に初めてなためか、人の姿を借りた  
 女神の、暁が生まれる頃、庭に朝を摘みつつ、  
 あるいは夕べ、陽が首をすでに垂れ、  
 眠りの国へと去り行く頃、散策の姿と  
 思い込む。

053. Tout vis à vis de vostre portraiture  
 054. J'ay mis d'un Roy l'excellente peinture,  
 055. Bien jeune d'ans, qui jamais n'eut le coeur  
 056. Point ny blessé d'amoureuse langueur,  
 057. Et toutesfois à luy voir le visage  
 058. Chacun diroit qu'il ayme vostre Image,  
 059. Et qu'allumé des rais de vostre jour  
 060. Il se cousume & s'escoule d'amour,  
 061. Dedans la cire, & que la cire mesme  
 062. Sentant sa flame en devient toute blesme.

053 78—87年の版では《Droit au devant de vostre portraiture》。音調は確かに柔らかくなっているが、母音〈i〉の畳み掛けを避けたのだろうか？

054 ローモニエの脚注によれば、この肖像画はシャルル九世のもの。確かに彼女の亡夫、フランソワ二世のものとは、以下の「恋の苦悩に傷ついたことのない……」「年端もゆかぬ」という表現からして、考えられない。ちなみに1560年、フランソワ二世は16才で死去、当時シャルル九世は10才。その兄嫁への思慕の深さは相当なものであったという(J. C. パスカル、『呪われた女王—マリー・スチュアート ファイル』参照)。

056 78—87年の版では《Ny l'oeil blessé d'amoureuse langueur》。かなり大幅な変更であるが、ローモニエの脚注にある通り、《point》は否定辞ではなく、動詞《poindre》の過去分詞で、この場合は「突き刺す」という古い意味で用いられている。この間の経過をより詳しく語っているのがユゲの *Mots disparus ou vieillis*, (Droz, Genève, 1967年) である。「*poindre* という動詞は、実際、限られた変化形でしか用いられなかった。さらに、その意味は〈印を付ける〉、〈足を向ける〉でしかない。〈突き刺す〉という意味は完全に失っていた」(p.53)のであるから、アルカイズムとしてもほとんど成立しない状態であったと考えられる。したがって、この変更は当然のことであろう。

061—062 78—87年の版では《En sa peinture & que son portrait mesme/Comme amoureux en dvient froid & blesme》に。053と同様の理由による変更であろうか？

(拙 訳)

貴方の肖像に相對し

私が据えたのはある王のこの上なき似姿、



年端もいかぬ、恋の苦悩に刺され、  
 傷ついたこともないお方でも、  
 その似姿を見れば、誰もが口に、  
 王が貴方の似姿に恋していると、  
 そして貴方の輝きに照らされ、  
 ニスに塗り込められながら、  
 恋にやつれ、さまようとも、  
 その恋の炎にニスさえ青ざめるとも。

- 063 On jugeroit qu'il contemple voz yeux,  
 064 Doux, beaux, courtois, plaisans, delicieux,  
 065 Un peu brunets, où la delicatesse  
 066 Rit, non aux verds qui sont pleins de rudesse :  
 067 Aussi les Grecs, en amour les premiers,  
 068 Ont à Pallas Déesse des guerriers  
 069 Donné l'oeil verd, & le brun à Cythere  
 070 Estant d'Amour & des Graces la mere.

眼の色に関しては、ローモニエの脚注の指示の通り、初期のロンサールは、「初々しい乙女の眼の緑が好ましい」と語っている。「褐色の眼はシテールの女神のもの」とされているが、マルカスユスの注によれば、「ギリシャでは、黒い瞳はヴィーナスそして美しい貴婦人のものとされ、ホメロスの注解学者によると、〈よく動き、快活な眼〉を意味した」となっており、ロンサールの意見は若干ずれていることになる。

068 《Pallas》は女神アテナに倒された巨人、アテナがその皮で鎧を作ったことから、アテナの別名となった。

069 《Cythere》とはヴィーナスの別名のはずだが、上で触れた様に、ローモニエは、当然のことと考えてか、言及していない。この島の沖の海の泡からヴィーナス（アフロディーテ）は生まれた。

(拙 訳)

また人は王が貴方の目を観じていると思うやも、  
 穏やかで、美しく、気品あり、好ましい、かんばせの瞳  
 わずかに褐色の影差し、細やかさが  
 微笑む、粗野に満ちた緑の影はなし、  
 恋にかけては誰にも引けをとらぬ、ギリシャの  
 民も、武人の女神アテネには緑の瞳を、  
 愛と魅力の母アフロディーテには褐色の  
 瞳を与えたでは。

071 Luy donc, espris d'un visage si beau

072 Oû vit Amour, son trait & son flambeau,

073 En son portrait vous diriez qu'il soupire

074 Et que muet ne vous ose rien dire.

この箇所には、特に、注釈の必要は認められない。直ちに拙訳を掲げておく。

かくも美しき顔に見とれた王に、  
 アモルはその矢と松明を認め、  
 貴方もお分かりでしょう、王が肖像の中で  
 恋焦がれながらも、おずとして口きけぬことが。

075 Pource voyant mon maistre en tel ennuy,

- 076 Je suis contraint de raisonner pour luy,  
077 Parlant ainsi : O ame bien heurée  
078 Qui de ton soir achevas la journée  
079 Presque en naissant, & qui bien loin d'icy  
080 Vis dans le Ciel despestré du soucy  
081 Que je senty, comme un cruel orage,  
082 Le mesme jour que hasant ton voyage  
083 Tu vins là haut pour vivre sans douleurs  
084 Me laissant seul entre mille malheurs,  
085 Dont je n'avois, pour estre en mon enfance,  
086 Ou bien petite, ou nulle connoissance,  
087 Et qu'aujourd'huy grievement j'apercoy  
088 Depuis que l'age a commandé sur moy.

075 《pource》については、ユゲに《non pource》の用例があるだけで、その意味は「しかしながら」あるいは「～にもかかわらず」となっている。したがって「～なので」という意味と思われる。

077 《heurée》は動詞《heurer》の過去分詞，幸，不幸を問わず「ある定めに従わせる」の意（ユゲ）。M. L. は実詞から直に作られた動詞に分類し（t. II, p.213）, 「幸せにする」の意味だけを採用している（t. I, p.293）。ロンサールが78—87年の版で《O ame fortunée》と変更を加えていることからしてもユゲの判断の方が正確であろう。さらにこの行の脚注で、ローモニエは「ロンサールの口を借りて、まずシャルル九世が兄フランソワII世に話しかけ、ついで義姉マリー・スチュアートに直に話しかけ、その愛を告白している」とし、「マリー・スチュアートの1565年の再婚後では不可能なフィクション」と見なして、このエレジーが贈られた日付を同年7月以前とする根拠にしている（p.147脚注参照）。概ね首肯できる解釈である。

085 ローモニエの脚注では、《pour estre en mon enfance》は「私はまだ幼かったのだ」と解釈。現代であれば、原因を示すのであるから、不定法過去になるはずだが、当時はこのように不定法現在と共に用いられることがあった（グーゲネム、p.219）。

(拙 訳)

わが君がこのように苦しまれるのを見て、  
 私は彼に代わって言わざるをえません、  
 「ああ、生まれたばかりに等しいときに、  
 その生涯を終えた、幸いなる人よ、  
 悩みを解かれ天上に住まわれていらっしゃるのですね。  
 この私はたけり狂う嵐のような苦悩にさいなまれております。  
 あの日、駆けるようにして、私を奈落に放り出し  
 苦しみを逃れて生きようと高みへと行ってしまわれた、  
 当時、幼かったが故に、奈落のことなど  
 ほとんど分かりはしませんでした、  
 今は痛いほどに思い知らされております、  
 それだけ歳をとったのです。

089 Las! tout ainsi, belle ame fraternelle,  
 090 Qu'estant volé sur la vouste eternelle,  
 091 Me feis Seigneur du sceptre des Gaulois,  
 092 Que ne m'as tu, de celle que je vois  
 093 . Fait heriter, succedant en ta place  
 094 Pour embrasser cette brulante glace,  
 095 Dont la froideur, qui le coeur m'a blessé,  
 096 Vaut tout l'honneur que tu as delaissé :  
 097 Car Sceptre, Empire & puissante couronne

- 098 Ne vallent pas le mal qu'elle me donne.  
 099 Mais pourquoy sens-je en mon age imparfait,  
 100 Avant le temps, le mal qu'elle me fait?

093 78—87年の版では、《Fait en mourant heritier de ta place》。つまり、《succedant》は「たどり着く」の意味で、当時は現在の *arriver* の役割を担っていた（ユゲ）。

096 71—73年にかけての版では《…que tu m'as delaissé》、さらに78—87年では《…qu'icy tu m'as laisse》と改められている。《delaissier》は「遺産として残す」という意味を持っていた（ユゲ）が、この時期、徐々に廃れて行ったと考えられる。

しかし、この箇所はどうにも技巧が目につくのではなかろうか。マリー・スチュアートの美しさを讃えるためとは言え、迂言に過ぎる、一言で言えば「くどい」のである。ガドツフルが「詩的楽節と散文的楽節とが重なり合う」（前掲）とロンサールの詩法を指摘しているが、散文的傾向が勝ちすぎていると言うべきかも知れない。

(拙 訳)

ああ！ 兄上様、永遠の天界へと  
 飛び立たれ、こうして私を  
 ガリアの民の君王とされたのですね、  
 そして今日にしているお方も、亡くなられた  
 ときに私にお譲り下さったのではありますまいか、  
 けれどそれは燃えさかる氷を抱くようなもの、  
 その冷たさは、私の心臓を傷め、  
 兄上が遺して下さった栄誉にも並ぶほど、

王杖も、帝国も、いかに強大な王国も  
あの方が私に与える苦痛には及びもしないのですから。  
ですが、なぜまだ未熟な私が、早くも  
あの方ゆえの苦悩を味わねばならないのでしょうか？

(以下次回)

追 記： 前回、この集注は 1562 年以降の作品について連続して行う旨を述べておいたが、『人文研究』という紀要の性格を持つ場にふさわしいものかどうか疑問に感じている。「マリー・スチュアートへのエレジー」については行きがかり上、本誌上を借りて完結させていただく予定であるが、それ以降については私家版の形で問うべきではないかと考えている。今回に関しても、未見の文献が多く残っているため、このように短いものになったことをお許し願いたい。